２０２２年３月２０日　説教『ペトロの信仰告白』

聖書　イザヤ書４８章１～８節、マルコ福音書８章２７～３３節

高橋克樹牧師

本日のテキストはイエスがメシアではないという世間の評判に対して、ペトロが的確な信仰告白をする場面です。『人々は、わたしのことを何者だと言っているか』とイエスに問われた弟子たちは、世間の風評を告げます。いまだイエスの本質を知らない世間には、さまざまな評価がありました。洗礼者ヨハネの再来だという者もあれば、南北分裂後の北イスラエルのアハブ王と激しく対立した預言者エリヤの再来だという意見もありました。しかし、イエスはそのような世間の風評が聞きたくて弟子たちに質問したのではありません。世間の風評を聞いているのではなく、『あなたがたはわたしを何者だと言うのか』（２９節）という問いが、そのことを示しています。イエスは弟子たちの風評に惑わされないメシア認識を問うているのです。

ただ、当時ローマ帝国の支配下のガリラヤで、イエスが何者かという問いに対して、預言者エリヤの名前が出てきたことは次のことを示しています。一般の人々は、ローマ帝国の支配の桎梏から解放するメシア＝救い主が到来して、自分たちを救ってくれるはずだという希望を持っていました。しかし、イエスがエリヤの再来だという認識は正しくはありません。イエスがエリヤの再来だということは、イエスの存在が来たるべきメシア到来の先触れを示すことだと世間は見ていたということです。というのは、旧約聖書のマラキ書３章２３～２４節では『見よ、わたしは大いなる恐るべき主の日（＝救い主到来の日）が来る前に、預言者エリヤをあなたたちに遣わす』とあるように、メシア到来に先立って、神は預言者エリヤあるいはエリヤの霊を持った別の預言者をこの世に送ると人々は信じていたからです。洗礼者ヨハネの名前が登場するのも、この文脈においてです。それまでイエスの言葉を聞いたり、奇跡の業を見てきた人々にとっても、イエスはメシアが到来することを予め告げるメッセンジャー以上ではなかったのです。

もし、世間がイエスに説教を依頼するなら、誰もが「メシアが来るとき」という題名で、将来において到来するメシアの話を期待したことでしょう。決して「イエスこそが他ならぬメシア」だという意識は世間の人々にはまかったのです。ですから、ペトロの『あなたは、メシアです』という応答は、あなたはメシアの先触れのような存在ではありません。あなたこそメシア（＝キリスト）です、という宣言だったのです。その意味でペトロのキリスト告白は独自のものであったのです。わたしたちにもペトロのような信仰告白が求められています。全力を尽くして、誠実に告白しなければならない。

しかし、ペトロはこのあと、十字架の苦難にあうという必然性を否定してイエスから厳しい叱責を受けますし、ゲッセマネでのイエスの苦悶を目撃しても眠り込んでしまいます（１４章３２～４１節）。これらのことは、人間の信仰告白が正しくても、現実には行動が伴わないことが往々にして起こるということを私たちに教えているのです。信仰告白においてイエスがキリストであるという大正解の告白を言っていれば、信仰の正当性が保証されるというものではないのです。信仰告白は大切なものです。しかし、キリスト告白をしながら、なおキリストについて十分には「わかっていない」自分を顧み、わからないからこそ、本当にキリストが自分にとってどういう救い主なのかを理解しようと追い求め続けていくのが信仰なのです。信仰告白は、信じている自分に、自分でも知らない領域があるという謙虚さへと導くものなのです。

マタイ福音書によると、ペトロはイエスに対して間違った理解をしていることがわかります。イエスから『あなたはペトロ（岩）。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。……わたしはあなたに天国の鍵を授ける』（１６章１８～１９節）と言われたあとで、十字架への道行きを弟子た

ちに告白したイエスに対して『イエスをわきへお連れして、いさめ始めた』（同２２節）からです。マルコ福音書でも同じです。『サタン、引き下がれ』と叱責されています。人間は自分が誉められると陽性転移を起こしやすく、ペトロはこの陽性転移によってイエスに対して自分は何でも言えるという錯覚を持ってしまったのです。このペトロの行動は非常に理解しやすいものです。マルコ福音書でみると、ペトロが『あなたこそキリストです』と告白したのに対して、イエスは沈黙を命じて人の子の受難を予告しました。すると、ペトロは『イエスは傍らへ引き寄せ、彼を厳しく叱りつけた』（私訳　８章３２節）のでした。弟子がイエスを叱りつけたのです。それに対してイエスもまた『ペテロを叱って言われた』と原文ではなっています。ここでの叱責の動詞はいずれも強い叱責を表すエピテマオーが用いられています。新共同訳はペテロがイエスに対する叱責を「いさめた」と意訳して表現を和らげていますが、どちらもエピテマオーが用いられており、弟子がイエスを叱りとばし、イエスが弟子を叱りとばすという激しいやりとりがあったのです。

ペトロがイエスの受難予告を叱ったように、私たちはイエスを自分の願望の対象にしやすいのです。イエスをキリストと告白しながら、真実の信仰告白をしていないかもしれない。プロテスタントは自分を起点にして信仰を告白しますので、そういうことが起こる盲点もあるのです。たとえば、ヨブは自分が不幸に見舞われたとき、「なぜだ」と叫びましたが、それは自分の不幸でいっぱいになっていたからです。自分の苦しみを起点として「なぜだ」「なぜだ」と神に反問しました。それに対して神は天地創造を語って、ご自分が創造の業を為した時にヨブだけを造ったのではないことを語りました。神はたくさんの生ける存在を造りました。そして、全宇宙も造られたのであって、すべてのものが創造主において関係性を持って関わろうとしているのです。そのことをヨブは気づかないで、あるいは忘れてしまって、自分の苦しみだけに囚われてしまったのでした。だからイエスの叱責はペトロ一人への叱責ではなく、全被造物が創造主において、喜びや悲しみも、苦しみにおいて連帯していることを忘れないようにという意味も含まれているのです。つまり、信仰者個人の苦しみにおいて、他の人間の苦しみも同時に苦しまれるように創造主は被造物を想像したのです。隣人愛はキリスト教の中心的なテーゼですが、それは個人的な倫理性を超えて、創造主にあって他者をどのように見るかによって必然的に導かれた事柄なのです。ウクライナの状況に心を痛めるのも、一人の苦しみがすべての人の苦しみに関わっているからです。

イエスをキリストとして告白することを教会において受け止めるならば、体の一部が苦しめば体全体が苦しむという認識を持つことです。兄弟姉妹の一人が苦しめば、他の兄弟姉妹もみな苦しむということを知っていて、その認識から行動を起こすということです。このキリスト告白的な行動指針があれば、自分の苦しみは他者の苦しみへの通路となっていきます。つまり、他者の苦しみは自分も担っているのであって、なにもキリスト倫理的に隣人愛を発揮すべきか否かという「自分を起点にして悩む」ことではなくなるのです。他者を愛することが、同時に他者の苦しみを共に担うことだからです。人間は苦しみや悲しみに出会ったり障害に出会うと、ヨブのようにそれらを排除すればいいと考えがちです。けれども創造主の視点からみれば、そういう考え方は神や他者との関係性の中で生かされている者としては間違った理解なのです。そういうことをこの時点の弟子たちは知るに至っていませんでした。だから、ヤコブとヨハネは自分たちが人に仕えるよりも、この世的な偉大さに囚われているのです（１０章３５～３７節）。真実のキリスト告白とは、創造主を起点にして自分を捕え、他者の苦しみや悲しみが見えてくる関係性の中で生きていくことを知っていくことが大切なのです。そのことが土台としてあって、他者の苦しみに目覚めることを通して、神の呼びかけにも目覚めていくのです。十字架を担って生きていくとは、そういう他者や社会との関係性の中で自分が生かされていることに気づくことなのです。

2